

# アラビヤナイト

## 三、アリ・ババと四十人のどろぼう

(菊池寛)

昔、ペルシャのある町に、二人の兄弟が住んでいました。兄さんの名をカシムと言い、弟の名をアリ・ババと言いました。お父さんがなくなる時、兄弟二人に、財産を半分ずつに分けてくれましたので、二人は、同じような財産を持つておりました。

さて、カシムはお金持のおじょうさんをおよめさんにもらいました。それからアリ・ババは貧乏な娘をおかみさんにもらいました。お金持のおじょうさんをもらったカシムは、毎日ぶらぶら遊んでくらししていましたが、そのはんたいに、アリ・ババは毎日せつせと働かなくてはなりません。毎朝早くから三びきのろばを引いて森へ出かけて、木を切つては、それを町へ持って帰つて売つて、そのお金で、やつとその日その日をくらししてゆくというありさまでした。

ある日のこと、アリ・ババが、いつものように森へ行つて木を切つていますと、はるか向うの方に、まっ黒い砂けむりが、もうもうと立っているのが見えました。その砂けむりは、見るまにこちらへ近づいて来ましたが、見れば、それはたくさんの方が馬に乗つて、いそいでかけて来るのでした。

「きつと、どろぼうにちがいない。」アリ・ババはふるえながら、三びきのろばをかくして、自分はそばの木にのぼりま

した。そして、こわごわ様子を見ていました。

アリ・ババののぼった木の下まで来ると、どろぼうたちは、みんな馬からとびおりました。くらにつけてあつた袋もおろしました。

そして、そのどろぼうたちのかしららしい男が、木のそばにある岩の上ののぼつて行きました。そしていきなり、

「開け、ごま。」

と、大きな声でさけびました。すると、どうでしょう。その岩が、ぱつと二つにわれました。中には重そうな戸が閉まっているのが見えました。やがて、その戸は見る見るうちにすうーと開いてゆきました。そして、どろぼうたちが、その戸の中へどこかどかどか入つて行くと、音もなく戸が閉まつてしまいました。

やがてまもなく、どろぼうたちは出て来ました。さっきのかしら、また、

「閉まれ、ごま。」

と、さけびました。戸はすうーと閉まつてしまいました。そして岩も、もとの岩になつてしまいました。どろぼうたちはどこかへ去つてしまいました。

アリ・ババは木からおりました。そして、さっきどろぼうのかしらと言つた、ふしぎな言葉をおぼえていたものですか、岩の上へのぼつて、

「開け、ごま。」と、どなつてみました。

そうすると、やつぱり岩がわれて、さっきの戸が開きました。アリ・ババは中へ入つて行きました。その中は大きなほ

ら穴でした。りっぱな宝物や、金貨や銀貨をつめこんだ大きな袋が、すみからすみまで、ぎっしりとつみ重ねてありました。これだけのものをあつめるには、まあ何年かかったことだろうと、アリ・ババは思いました。そしておそろおそろ、金貨をつめこんだ袋ばかりを六つ取り出しました。そして手早く三びきのろばにつんで、その上に金貨の袋がかくれるほど、切った木をつみ重ねました。それから、

「閉まれ、ごま。」と、大きく言いました。そうすると戸はやっぱり閉まって、岩にはあとかたもなくりました。

アリ・ババは家へ帰って来ました。おかみさんは金貨の袋を見て、大へん悲しそうな、またこわいような顔をして、アリ・ババに泣きつきました。

「まあ、お前さん、もしかしたらこれは？……」とまで言って、それからさきはもう声が出ない様子でした。

するとアリ・ババは落ちつきはらって、  
「安心おしよ。なんで私がどろぼうなんかするものかね。そりゃ、この袋は、もともとだれかがぬすんだものには、ちがいないがね。」

と、言いました。それから、金貨の袋を見つけたいちぶしじゅうを話して聞かせました。

それを聞いて、貧乏なこのおかみさんは大へんよろこびました。そして、アリ・ババが袋からつかみ出す金貨を、「一枚、一枚」とかぞえはじめました。

そのうちアリ・ババが、ふと気がついたように顔を上げて、「そんなかぞえ方をするのはばかだね。そんなことをしてい

たら、みんなかぞえてしまうには何週間かかるかわかりやあしないよ。いっそこれは、このまんま、庭へ穴を掘ってうずめようじゃないか。」と、言いました。

するとおかみさんは、  
「でも、私たちがどれほどのお金持になったのか、知っておいた方がよござんすよ。」

そう言って、はんたいしました。そして、

「私はこれからカシム兄さんのところへ行って、ますをかりて来ましょう。そのますで、私がこの金貨をはかっている間に、お前さんが穴を掘ったらいじやありませんか。」

と、言いました。そして、おかみさんは、カシムの家へ出かけて行きました。

カシムの家では、ちょうどカシムが来るすでした。それでカシムのおかみさんに、

「姉さん。すみませんが、ますをかしてください。」とたのみました。

「すぐに返しに来るなら、かしてあげてもよござんす。」

カシムのおかみさんは、ぶあいそうな顔をしてこう答えました。そして、どうしてアリ・ババの家でますがあるのか、ふしぎに思ったものですから、ますの底に少しばかりラード（ぶたの油）をぬって、かしてくれました。こうしておけば、このますで何をはかっていたにしろ、底にくっついて返ってくるにちがいないと考えついたからでした。

アリ・ババのおかみさんは、ますをかりて、大いそぎで帰って来ました。そして金貨をはかってしまうと、また大いそ

ぎで返しに行きました。けれども、ますの底に、一枚の金貨がくつついていたということには、ちっとも気がつきませんでした。

「まあ、なんてことだろう。アリ・ババの家では、あんまりお金がどっさり入ったので、かぞえきれないで、ますではかったんだね。」

カシムのおかみさんは、金貨を見つけて、いまいましそうにどなりました。

カシムが帰って来て、この話を聞いて、もっともとおこりました。そしてすぐに、アリ・ババの家へ出かけて行きました。

「何だってお前はかくすんだね。私の家内は、お前がかぞえきれないほどたくさんのお金を手に入れたので、ますではかったってことを、ちゃあんとかぎつけてるんだよ。さあどうして、そんなにたくさんのお金をこしらえたのか、はくじょうしろ。」と、アリ・ババにしかるように申しました。

アリ・ババは、せっかくかくしていたことを知られてしまったので、がっかりしました。仕方がないので、兄さんに何もかも話してしまいました。そして、

「きつと、だれにも言わないでくださいよ。」と、言いながら、あの、「開け、ごま。」「閉まれ、ごま。」という言葉を、教えてしまいました。

カシムは、自分の家へ帰って来て、十二ひきのろばを馬やから引き出しました。そして、それを引いて森の岩をさして出かけました。岩の前まで来た時、ろばをそばの木につない

でにおいて、

「開け、ごま。」

と、言いました。すぐに岩がわれて、あのふしぎな戸が開きました。

もともとカシムは、大へんなよくばりやでした。それで、どろぼうたちの宝物を見て、とび上るほどよろこびました。

そして、金貨の入っている大きそうな袋をえらんで、それを二十四も、戸のところまで引きずり出して来ました。そして、

「開け、大麦。」と、さげびました。

まあ、どうしたのでしょうか、戸は閉まったままでした。カシムはあわてて、

「開け、あずき。」と、言ってみました。けれども、やっぱり戸は開きませんでした。それからもうますますあわてて、「開け、小麦。」だの、「開け、あわ。」だのと、おぼえていくかぎりの、穀物の名を言ってみましたけれど、やっぱり、だめでした。戸は一寸も開きませんでした。カシムは「ごま」をすっかり忘れていたのでした。

ちょうどその時、どろぼうたちが馬に乗って帰って来ました。そして、かしらが、

「開け、ごま。」

と、さげんで、ほら穴の中へ入って来ました。そして、カシムと、引きずり出した金貨の袋とを見つけてしまいました。

どろぼうたちは、自分たちの、人にかくしていたお倉を見つけたので、大へん腹を立てました。そして、いきなりカシムをつかまえて、切り殺して、からだの肉を切りきざん

でしまいました。そして、ここへだれでも金貨をぬすみに来ないように、カシムの肉のきれを一つ一つ、ほら穴の中へつるしました。

カシムのおかみさんは、夜になつてもカシムが帰つて来ないので、大へん心配しました。そして、アリ・ババの家へ行って、カシムをさがしに行つてくれとたのみました。それでアリ・ババは、あくる朝早く、三びきのろばを引いて、ほら穴さして出かけました。

「開け、ごま。」そう言うてから、アリ・ババは中へ入つて行きました。しかし入るとすぐに、おそれてちぢみ上つてしまいました。兄さんが殺されて、切りきざまれていましたから。アリ・ババは、ふるえながら、兄さんの切りきざまれた肉を、一きれずつていねいによせあつめて、二ひきのろばにつみました。そして、あとの一ぴきは強い小さな黒馬でした。これには金貨の袋を二つつみました。

アリ・ババは町へ歸つて来て、まずカシムの家の戸をたたきました。すると、モルジアナという女どれいが出て来ました。この女はカシムの召使めしつかいの中でも、一番りこう者でありました。

アリ・ババはモルジアナを招まねいて、その耳に口をつけて、「お前のご主人はね、どろぼうに切りきざまれて殺されてしまったのだよ。けれども、だれもまだこのことを知っている人はないのだからね、お前これを、だれにも知らさないですますような工夫くふうをしておくれ。」と、たのみました。

それから、アリ・ババは家の中へ入つて行って、カシムのおかみさんに、いっさいの話をして聞かせました。

「けつして、悲しんではいけませんよ。これからは私たちと一しよにくらしましよう。私たちの宝物も分けてあげましよう。私たちはよく気をつけて、このことを、人にさとられないようにしましようね。」と、約束しました。

それから、切りきざまれた、かわいそうなカシムを、ろばからおろして、となり近所の人々には、ゆうべ急病で死んだと言つておきました。

モルジアナは、だいぶはなれた町の、おじいさんのくつ屋をたずねて行きました。そして、針はりと糸いとを持って自分と一しよに来てください、とたのみました。それから、

「お前さんにたのみたい仕事というのは、どうしても人に知られてはならないことだからね、気の毒どくだけれど、お前さんに目かくしをして、その家まで私が手を引いて行くのですよ。」と、言いました。

おじいさんのくつ屋は、はじめはいやだと言いましたけれども、モルジアナが金貨を一枚そつとその手ににぎらせましたら、すぐしようちしました。モルジアナは、このくつ屋をつれて歸つて来て、切りきざまれた主人の肉を、ぬいあわせするように言いつけました。くつ屋は、だれだつて、ぬいあわせたとは思えないほど、かっこうよくつぎあわせました。それからモルジアナはまた、くつ屋に目かくしをして、その店までつれて行きました。

こんなふうにして、カシムが殺されたことは、だれにも知れないですみそうでした。そして、アリ・ババとそのおかみさんとは、カシムの家に引っこして行って、みんなで一しょにくらすことになりました。

けれども、その後どろぼうたちは、あのほら穴へ帰って、カシムの中からだと、金貨の袋がまた二つもなくなっているのに、気がつきました。そして大へんおこりました。

「もう一人、おれたちのお倉を知っているやつがあるんだな、そいつをすぐに見つけなきゃならない。」と、さげびました。

そうして、仲間の一人が、どろぼうでないような風をして町へ行って、あの切りきざんだからだをぬすんで行った者を、見つけて来ることにしようかと相談がきました。

さて、あくる朝、どろぼうの一人が、とても早く町へやって来ました。その時分は、カシムの中からぬいあわせたおじさんのくつ屋の店は、もう戸をあけていました。

「お早う、おじいさん。大へん、ごせいが出ますね。ほう、お前さん、こんなに早くから仕事をはじめますか。ふむ、だが、お前さんの目が、こんなうすあかりで見えるんですかねえ。」

と、どろぼうは、さもなれなれしく声をかけました。すると、くつ屋は、

「どうしてどうして、あっしの目はね、若い者だつてかなやあしないんですよ。げんに、たったきのうのことですがね、あっしやあ、切りきざんだ人間の死がいぬいあわせました

よ。それがお前さん、だれが見たってぬい目なんかちつともわからないように、うまくできたんですよ。」と答えたのでした。

どろぼうは、しめたと思いました。そして、

「え？ そりやほんとうですか。そして、そりや、どこの、だれのです。」と、聞き返しました。

「それがね、あっしにだつてわからないんです。なぜかって、あっしやあ、目かくしをして、その家へつれて行かれて、また同じようにして、つれて帰ってもらったんですから。」と、くつ屋が言いました。

すると、どろぼうは、金貨を一枚、そつとくつ屋にぎらせました。そして、その家へつれて行ってくれないかとたのみました。

「お前さんにまた目かくしをして、私が手を引いて行ったら、おおよそのけんとうがつくでしょう。もしその家がわかったら、もつとお金をあげますよ。」と、言うのです。

そこで、とうとうくつ屋は、しょうちしました。そして、目かくしをされて、そろそろ歩きながら、カシムの家の前まで来た時、ぴたりとまりました。そして、

「ここにちがいありません。このくらいの遠さだったと思います。」と、言いました。

そこで、どろぼうはポケットからチョークを出して、カシムの家の戸に白い目じるしをつけました。そして大元気で、森の仲間のところへ帰って行きました。

それからまもなく、モルジアナは、このへんな目じるしを見つけてました。

これはきつと、だんなさまに悪いことをしようとする者がつけたしるしにちがいない、とモルジアナは思いました。それで、チョークを取って来て、町じゅうのどの家の戸にも、みんな同じようなしるしをつけて歩きました。

さて、どろぼうたちは、町へ行った仲間から、あの切りきざんだ人間の家がわかったということを聞いて、大へんよろこびました。そしてその晩、戸に白い目じるしのついている家をさして、かたきうちに出かけました。けれども、町までおしかけて来た時、どの家の戸にも同じ目じるしがついているので、どれが目ざす家だか、かいても知れませんでした。

「ばかめ、これが、りこうな人間のすることかい。お前は、すぐに殺してやるから待っている。」

かしらは、けさ見つけに来たどろぼうを、こう言ってしかりつけました。それから、

「仕方がない、どろぼうの家はおれがさがすことにしよう。」と、言いました。

次の日、かしらは、ふつうの人のような風ふうをして、くつ屋の店へ行つて、カシムの家を教えてもらいました。けれども、このかしらはりこう者ですから、チョークでしるしをつけたりなんかはしませんでした。気をつけてカシムの家を見て、しっかりとおぼえこんで置いて、晩のかたきうちの用意をしに、森へ帰りました。

そして、まずはじめに、ろばを二十ぴきと、大きなかめを

三十九と持ち出しました。そして、たった一つのかめに、油をなみなみとつきこんだきりで、ほかのかめには一人ずつどろぼうを入らせました。そして、このかめをろばにのせて、町へ出かけました。そして、カシムの家の前まで来たら、アリ・ババはちようど、外へ出て夕涼ゆうすずみをしているところでした。

「今晚は。」

かしらは、ていねいにおじぎをして、

「私は遠方えんぽうからまいった油商人でございますが、今晚だけ、とめていただけませんかでしょうか。そして、この油がめをお庭のすみにもおかせていただけたら、大へんつごうがよいのでございますが。」と、たのみました。

「ああ、よろしいとも。さあお入んなさい、さあ、さあ。」すぐにアリ・ババは、きげんよくしようちしました。そして門をあけて、ろばを庭の中へ入れさせました。それから召使のモルジアナに、お客さまにごちそうをしてあげるように、と言いつけました。

かしらは、ろばの背中から、かめを庭へおろしながら、中にいる一人々々のどろぼうに、自分が庭へ小石を投げたら、それをあいずに、かめのふたをやぶって、出て来いとつげました。

どろぼうたちは、せまいかめの中で、じつとしんぼうしながら、あいずがあるのを、今か今かと待っていました。

さて、台所では、モルジアナが、夕ごはんのしたくに、てんでこまいをしていました。ところが、そのいそがしいまっ

さいちゆうに、ランプがふっと消えてしまいました。あいにく家に油がぎれていました。それで、あの庭にあるたくさんの大きなかめから、少しくらいもらったっていいだろう、と思つて、ランプを持って庭へ出て行きました。そして、一ばん手近のかめのそばまで行きました。すると中から、「もう、出る時分じぶんですか。」と言ふ、しゃがれた声が聞えました。モルジアナは、びっくりしました。けれども、りこう者のことですから、落ちついた声で、

「まだ、まだ。」

そう言つて、次のかめのそばへ行きました。そのかめの中からも、同じようなことをたずねました。モルジアナは次から次と行きました。すると、どのかめからも、どのかめからも同じようなことをたずねました。モルジアナはどれにも同じように、「まだ、まだ。」と言つておきました。そして一番おしまいのかめにだけ、ほんとうの油がなみなみと入つていたのでありました。

「あああ、まあ、なんてふしぎな油商人なんだろう。全く、あきれてしまう。だが、これはきつと、だんなさまを殺すつもりにちがいない。」

モルジアナは、うっかりしては大へんだと思ひました。そこで、すぐに大きなつぼを持って来て、一番おしまいのかめから油をくみ出して、それを火の上にかけました。そして油がにえ立つのを待つて、それを、どろぼうたちのかくれているかめの中へ、次々とついで歩きました。それでどろぼうたちは、みんな殺されてしまいました。

こんなにしてしまつたものですから、かしらが庭をめがけて小石を投げた時は、どろぼうは一人だつて出て来ませんでした。それで、かしらが庭へ出て、かめの中をのぞきますと、どろぼうたちはみんな死んでいたのでした。せっかくのかたきうちは、すっかりあべこべになつてしまつたのでした。かしらは、ほうほうのていで、森へにげて帰りました。

あくる朝、モルジアナは、アリ・ババを庭へつれ出して、かめの中をのぞかせました。アリ・ババは人がいるのを見て、とび上るほどおどろきました。けれども、モルジアナが、手つとり早く、すっかり話をして聞かせましたので、どろぼうは、みんな死んでしまつてゐるのだということがわかりました。

アリ・ババは、こんな大きなさいなんからのがれたことがわかつて、大へんよろこびました。そして、モルジアナに、「ありがとう、ほんとうにありがとう。もうお前はどれいをやめてもいい。お前を自由な身にしてあげよう。また、そのほかにごほうびもあげよう。」と、言ひました。

さて、どろぼうのかしらは、手下が一人もいなくなつたので、森のほら穴で、ただ一人、大そうさびしく、また悲しい月日をおくつていました。けれども、アリ・ババへかたきうちをすることは、前よりもつとつと熱心ねっしんに考へていました。そして、またある一つの方法を考へつきました。そして、さっそく大きな商人のような顔をして、アリ・ババの息子むすこの店のお向いに店を出しました。

この大商人は大そう金持で、そして大そうしんせつでありましたから、アリ・ババの息子は、すぐにこの人をすきになりました。それで、お近づきのしるしとして、お父さんの家の晩ごはんによぶことにしました。しかし、このにせの商人は、アリ・ババの家へ行った時、アリ・ババに向って、

「あなたとご一しよにごはんをいただきたいのは山々でございますが、じつは私は、神さまに塩を食べませんと言ってお約束しているのでございます。それで、家でも、とくべつにいつも塩ぬきのりようりをさせているようなわけでございますから、どうかあしからず。」

と言つて、ごはんをたべることをとりました。するとアリ・ババは、

「まあ、そんなことなら、ぞうさもないことでございますよ。今晚は、いっさい、塩を入れないように申しつけますから。」と言つて、引きとめました。

モルジアナは、この言いつけを聞いた時、少しへんだなと思ひました。それで、おきゆうじに出た時、お客さまをよく気をつけて見ました。ところが、どうでしょう、そのお客さまはどろぼうのかしらで、しかも、そでの中に短刀をかくして持っているのがわかりました。モルジアナはおどろいてしまいました。

「ふん、かたきと一しよに、塩をたべないのはふしぎじやない。」と、モルジアナは心のうちでつぶやきました。ペルシヤには、こういう迷信があるのです。

モルジアナは、すぐに自分のへやへもどつて来て、おどり

子の着る着物を着ました。そして、晩ごはんが終つた頃を見はからつて、短刀を片手ににぎつて、お客さまのざしきへおどりをおどりに出ました。

モルジアナは大そうじょうずにおどつて、みんなにかっさいされました。にせの商人は、さいふから金貨を一枚出して、モルジアナのタンボリン（手つづみ）の中へ入れました。その時モルジアナは、片手に持っていた短刀を、やにわに商人の胸につきさしました。

「ふとどき者め、お客さまをどうしようというのだ。」アリ・ババがしかりつけました。するとモルジアナは落ちついて、

「いいえ、私はあなたの命をお助けしたのでございます。これをごらんくださいまし。」

と言つて、商人がそでの中にかくしていた短刀を取り出して見せました。そして、この商人が、ほんとうは何者であつたかということを申しのべました。

それを聞くと、アリ・ババは、ありがた涙にくれて、モルジアナをだきしめました。

「お前はわしの息子のおよめさんになつておくれ、そしてわしの娘になつておくれ、それがわしにできる一番の恩返しだ。」と、言いました。

さて、それからずいぶん後までも、アリ・ババは、こわがつて、あのふしぎなほら穴へ行つてみようとはしませんでした。しかし、ある年の末、もう一度行つてみました。ところが、どろぼうたちが死んでからは、だれも来ないらしく、中

は昔のままでありました。それでもう、こわい者が一人もいなくなることがわかりました。

それから後は、「開け、ごま。」と、アリ・ババが、まほうの言葉を唱えさえすれば、あのふしぎな戸がすうーっと開いて、穴の中には、持ち出しても、持ち出してもつぎることのないほどの、宝がありました。それで、アリ・ババは、国じゆうでならぶ者もないほどの、大金持になってしまいました。